県大生が認知症本フェア

高知市の書店 当事者の声生かす

高知県立大学の3年生で、高齢者福祉について学ぶ小笠原杏樹さん(21)が、アルバイト先の書店で認知症フェアを企画し開いている。大学での学びや認知症当事者の声を選書やポップ作りに生かしており、売れ行き好調。小笠原さんは「認知症を正しく理解し、共に生きるヒントにしてほしい」と話している。21日は、認知症を啓蒙(けいもう)する「世界アルツハイマーデー」。

きょうアルツハイマーデー

小笠原さんはイオンモール高知（高知市秦南町1丁目）2階、未来屋書店高知店でアルバイト。介護書の棚を担当する中で違和感を覚えたという。

現在の認知症ケアは、家族や介護者ら「支える側」の視点から、当事者の意思を尊重する形に変化してきている。ただ書店では介護保険制度の解説や家族の介護体験談、ケアのマニュアル本が目立った。「勉強していることと違い、認知症の本質的な理解を促すものが少ない気がしました」

そこで山下俊司店長に、世界アルツハイマー月間の9月に合わせたフェア開催を提案。大学教授らのアドバイスも受け、当事者が書いたものや予防に関する本、家族向けや専門職向けなどバランスよく並べた。

企画を通じて若年性認知症の山中しのぶさん(46)＝南国市＝とも知り合いに。「色や文字がごちゃごちゃしていると認識しづらい」といった指摘を受け、シンプルで見やすいポップ作りを心掛けた。出来上がった陳列棚に、山中さんは「若い学生さんが発信してくれると、認知症がより身近に感じられると思う。うれしい」と笑顔を見せた。

フェアを始めて以降、5冊以上が売れたという。山下店長は「介護の本はあまり動かないので、むちゃくちゃいい数字。学生の提案は珍しいし、アカデミックな視点が選書に生きている」と評価する。

小笠原さんは「認知症の症状が人それぞれ違うように、悩みもそれぞれだと思う。本が少しでも役に立てば」と話している。同書店のフェアは9月末まで。

（石丸静香）

認知症フェアで構えた棚を背に談笑する小笠原杏樹さん＝左＝と認知症当事者の山中しのぶさん（高知市の未来屋書店高知店）

2023年9月21日（木） 高知新聞掲載記事